

# 「一営業マンから見た小学校英語」

学校図書 佐々木純也

## 1 序

私の仕事の一つに小学校英語教材の販売があります。平成15年頃から取り組んでいる仕事です。委員会や学校へのPR活動の概略と、その経験で感じたことを何点か述べてみたいと思います。

一営業マンの狭い視野からの報告ということで、間違い・勘違いなどについてはご容赦ください。

## 2 背景

事の起りは弊社の社長が松香フォニックス研究所（以下「MP I」と表記）所長の松香洋子先生と出会い、小学校への教材販売についてMP Iと提携を始めたことにあります。

ある日の営業会議で「これから小学校英語教材を売ってもらうことになったから。」と切り出され、「MP Iの英語教材はこんなものです。」と説明を受けました。私自身は英語が苦手教科でしたし、英会話なんてとんでもないという意識でしたので正直戸惑いました。さらに、小学校への売り込み方法なんて皆目見当もつきませんでした。しかし仕事となれば嫌とも言えませんのでさまざまなアプローチを試みました。

## 3 当時の状況

### (1)文部科学省

平成4年には大阪市立の小学校2校で「小学校における外国語学習研究開発」をスタートさせました。平成14年度に実施された現行指導要領では「総合的な学習」の時間で「国際理解教育」の一環として外国語活動が実施できる状況になりました。

これと前後して、「小学校英語活動実践の手引き」(平成13年)、『英語が使える日本人』の育成のための戦略構想(平成14年)、『英語が使える日本人』の育成のための行動計画(平成15年)なども発表し、小学校英語導入の方向で準備していました。(中教審外国語部会でも「何年生から始めるか?」が議論の中心であったと洩れ伺っています。)

### (2)反対論

新指導要領の公示が政治的な理由で遅れに遅れる中、典型的には「国家の品格」に代表される反対論が巻き起こりました。文科大臣の微妙な発言もあって、議論が「どうやって始めるか?」から「導入するか、しないか?」に押し戻されたかに見えました。

### (3)委員会

金沢市のように英語特区の申請を行い、力を入れている所もありましたが無関心な委員会が多かったように思います。関心を持っていた委員会でもALTの導入を対応の中心に据えていて、担任主導型の英語教育を考えていたところは少なかったと思います。

### (4)学校現場

「総合的な学習の時間」の「国際理解教育」で英語活動を実践する学校が各地にできましたが、学校単独の実践活動がほとんどでした。行政単位でまとまった取り組みは少なかったと思います。

実践校では「ネイティブとのふれあい活動」「英語劇」「買い物などの場面設定による会話練習」などが見られました。

## 4 販売活動

### (1)実践校への売り込み

各地の実践校を尋ね、様子を聞くとともにPRを実施しましたが、すでにMP I教材を知っていた先生か

らの個人的注文があつたくらいでなかなか成果は上がりませんでした。学校にとってはそれまでの実践のほうが重要であり、単なる民間会社の一営業マンの提案する「違う方法」は受け入れられなかったと思われます。さらに、効果が未知数の物に割く予算も無かったと思われます。

## (2)委員会への売り込み

各地の教育長や担当指導主事に面会し、状況と考え方を聞くとともにPRを実施しました。反応は芳しいものではありませんでした。「小学校英語」に対する温度差も激しく、“学校任せ”“派遣ALT任せ”“無関心”“反対論”などさまざまな様子を知ることになりました。

一般的に委員会への売り込みは予算措置を必要とすることになるので一朝一夕にはいかないのが常ですが、取り組んでもらえれば継続的なものになり教育効果も期待できるので気長に続けました。

## (3)成果

旧神辺町（現福山市）6校に平成16年4月から4名のALT導入が決まり「英語活動」が始まることになりました。それに伴い委員会がカリキュラムとノウハウを探していることを知り、MPIのPRを行いました。重政教育長（当時）の決断でMPIメソッドの採用が決まり、松香先生の講演と研修、及び、教材の導入が実施されました。

学校現場的には不安だらけだったと思われませんが、委員会の体制作りが良く考えられていたためその後2年間の「英語活動」は大変充実していました。合併後、中学生を対象とした福山市の英語スピーチコンテストで神辺の生徒たちが上位グループを占めていたと聞いたときは我が事のように喜びました。

その後、安芸高田市や世羅町でもMPIメソッドを導入していただいております、広島県下で広がりを見せつつ現在に至っています。

## 5 MPIについて

ここで、MPIについて簡単に述べさせていただきます。

### (1)理念と目標

「1億3千万人の英語好きを育てたい」がスローガンです。

目標は「中学3年生で同世代の世界の子ども達に英語で自分の考えが言える子供を育てる」です。

### (2)方法

「聞く」「話す」「読む」「書く」という言語習得の順番を重視しています。

小学校段階では「聞く」「話す」ことを重視し、正しい発音とイントネーションの英語を大量に「インプット」することを勧めています。インプットは「単語」ではなく「文（かたまり）」で与えることもお勧めしています。大量のインプットで聞き取る力をつけて英語のデータベースを作り、「発話（アウトプット）」を気長に待つという考え方です。

MPIの小学校英語のイメージは日本語教育で言えば小学校国語の前段階の体験活動のレベルだと思います。赤ちゃんが言葉を話すまでのプロセスを、英語で小学生（英語年齢0歳と考える）に環境として与えるといった感覚です。

### (3)MPIの考える小学校英語のポイント

#### ①担任

導入初期の主な役割はクラスコントロールです。英語の聞こえる環境作りを心がけていただき、児童の目線から逃げずに楽しそうに活動し、英語を楽しむ手本を示していただくことが重要と考えています。さらに、できた児童を褒める役目も重要です。

英語力は問題にしていません。ALTや音声教材の活用で十分効果が上げられると考えます。

## ②カリキュラム

学校、あるいは地区の統一カリキュラムが大切です。

担任とALT(または地域支援者)の役割を明確にし、短時間の打合せで授業に臨めます。さらに年間を通じた見通しを持つことができます。

作成したカリキュラムを蓄積することにより、授業方法の改善が期待できると考えます。

## ③教材

正しい英語の音を与えるために良質の音声教材の活用をお勧めしています。

## ④スキルについて

MP Iはスキルも大切だと考えています。目標として「英語でのコミュニケーション」掲げる以上、英会話のスキルは必要です。スキルの習得を目標にしているわけではありませんが、算数で「九九」というスキルが身につけてないと掛け算・割り算が不自由な状況になることと同じだと思います。

以上、簡単ですが私が思っているMP Iの特色です。営業マンのため少々PR色が出た点はお許しください。

## 6 今後の見通し

今年(平成21年)4月から5年生・6年生に英語ノートが配布され、教師用指導書及び指導用CDと電子黒板対応のソフト(DVD)も学校に配られる予定と聞いています。年間35時間を目標に「外国語活動」が始まります。

教材販売の点から言えば、現場が「英語ノート待ち」の状況になり教材の動きが停滞しています。英語ノートとの関連使用を訴えながらPR活動を展開することになりそうです。

## 7 雑感

### (1)「担任力」

MP Iの小学校英語を早期に導入していただいた学校でもすべての先生が納得して始まったというわけではありませんでした。導入前には「やりたくない、イヤダ!」と思われていた様子でした。私が感心したのはそんな様子だった先生もいざ始まってみると実に上手に指導されるようになることでした。教材の活用方法や指導方法などに工夫を凝らし、いかに効果的な授業をするかを熱心に研究されていました。他教科・他領域での実践研究の経験が生かされているように感じました。特に、クラスコントロールの場面で発揮される「担任力」には脱帽しました。

### (2)コミュニケーション能力としての「英語」

この仕事を始める前の私なら「英語」と聞けば「単語」と「文法」を思い浮かべていました。「単語を覚えて文法を理解すれば読めるし書ける。そうすれば話せるようになる。」とっていました。確かに、大学生の頃は専門分野の英語の文献はある程度読めるようになっていました。しかし、「会話」になるとさっぱりでした。話せないために自分の英語力を過小評価し、苦手教科の筆頭にしていました。話せないのは発音も含めた語彙力が足りないのと文法理解が不十分なためだと思い込んでいました。今はそれが間違いだったと分かります。話せなかったのはコミュニケーション能力としての「英語」つまり「英会話技能」を身につけなかったからという単純な話です。

「英会話技能」は文字通り「技能」ですから「理解」するのではなく「習得(体得)」すべきものです。音楽や体育と同じジャンルと考えられます。私の英語経験は「理解」する努力ばかりで「習得(体得)」が抜けていたわけです。

### (3) 「国語」と「小学校英語」

小学校英語反対の立場の方から見ると、両者は相容れないとお考えかもしれません。しかし、同じ「言語」という事では括れますし、表現力の向上のためには異言語の習得も有効ではないかと思えます。反対論の方もぜひ偏見を捨てて評価していただきたいと思えます。

## 8 夢

義務教育の各教科・各領域で育んだ日本人としてのアイデンティティーを、自信を持って世界に発信できる子どもが一人でも多く出現することを願って止みません。私は英会話技能の習得がその可能性を高めるひとつの方法であると感じています。

さらに言えば、金子みすゞの詩にある「みんな違ってみんな良い」は共生のためのキーワードのひとつだと思います。この感覚を共有するには「みんな」に同じ土俵が必要です。現在の国際社会では「英語」というツールが同じ土俵に乗る一番の早道だと思います。できるだけ多くの子どもたちにそんな便利なツールの存在と可能性を体験してほしいと思えます。

## 9 結びに代えて

雑感を含めて私の活動や思いを書きましたが、国語研究サークルの雑誌に載せる内容としては異質と思えます。そんな中身にもかかわらず最後までお読みいただいたことに感謝いたします。